

第28回ワークショップ報告 「パラリンピックとアクセシビリティ」

永松陽明

目次

1. イントロダクション
2. パネリスト報告
 - 2-(1). アクセシブルな会場の創造
 - 2-(2). パラリンピアンは準備ができているが、東京はどうか
3. 討論
 - 3-(1). パネリスト紹介
 - 3-(2). 質疑応答

1. イントロダクション

本稿は、2018年2月20日に日本財団ビル2階大会議室にて開催した「パラリンピックとアクセシビリティ」の記録を再構成したものである。

パネリスト及び報告題目、進行を表1に示す。

表1 「パラリンピックとアクセシビリティ」の概要と進行行程

| タイムライン | 内 容 |
|-------------|---|
| 10:00-10:30 | 「アクセシブルな会場の創造」 マーク・トッド（アクセス・オール・エアーズ） |
| 10:30-11:00 | 「パラリンピアンは準備ができているが、東京はどうか」 マーニー・ピーターズ（マーニー・ピーターズ社） |
| 11:00-12:00 | 総合討論 司会：川内美彦（東洋大学ライフデザイン学部 教授） 討論者：マーク・トッド，マーニー・ピーターズ， マセソン美季（日本財団パラリンピックサポートセンター） |

2. 講演

2-(1). 「アクセシブルな会場の創造」

マーク・トッド (アクセス・オール・エリアズ 主席コンサルタント)

A. アクセシブルデザインにおける3つの原則

これまで30年以上、アクセシビリティに関する仕事に従事してきました。1999年からはコンサルティング会社を立ち上げ、スポーツのメガイベントに関わっています。また、IPC (International Paralympic Committee: 国際パラリンピック委員会) と共にアクセシビリティに関するマニュアルを作成しており、現在はIPCのアクセシビリティに関する専門家チームにおります。これまで関わった大会は2002年マンチェスターで行われたコモンウェルスゲーム¹や2012年のロンドンオリンピック・パラリンピック大会などで、様々な経験をしてきました。このような背景や経験から、どの大会においても、アクセシブルデザインには3つの原則があると思います。それらは、「公平性 (Equity)」「尊厳 (Dignity)」「機能性 (Functionality)」です。

「公平性」とは、身体的な状況が異なる中で、誰しもが同じ体験ができるということです。「尊厳」とは全ての人々が平等な状況にあることを指します。障がい者にとっての尊厳が守られるアクセシビリティは、誰にとっても役立つものであり、社会に対してもメリットがあります。東京は先端的な都市ですが、この視点ではまだやるべきことが足りていないと思います。「機能性」とは、使いやすさのことであり、具体的には、施設へのアプローチのしやすさ、様々な機器の操作性の高さ、交通機関の快適な利用などがポイントになります。東京は、初めての訪問者には難しい部分が多く、情報提供の手段などの改善が必要だと思います。彼らのファーストインプレッションを良くしてほしいと思います。

B. チケット販売におけるアクセシブルデザインの取り組み

大会を成功させるには、アクセシブルデザインの取り組みだけでは完結しません。関連するサービスの水準を向上させ、障がい者の期待にも応えていく必要があります。そのような中で、チケット販売は重要な位置を占め、アクセシブルであることが求められます。具体的には、インターネットのウェブサイトのデザインも含め分かりやすく設定されるべきです。ウェブサイトへのアクセスに障害・問題がある場合は、電話での対応になりますが、サイトに不具合が発生すると数十万人から電話がかかってきます。その

対策のために、ウェブの仕組みを強化しました。その仕組みとして、誰でもが簡単にアクセスできるユーザビリティ（使い勝手の良いレイアウト）を導入し、「階段を降りなくてよい」「端の席やビデオスクリーンの側に座りたい」などの要望を選択できるようにしました。

C. 会場準備におけるアクセシブルデザインの取り組み

東京大会にとってロンドン大会での経験から、特に会場について多くのことを学べると思います。ロンドン大会の取り組みの一例として、全ての会場に車椅子観覧席を1%設置する目標を立て、実行してきました。また、障がいを持つ観客の見えやすさを実現するために、サッカー、馬術、バスケットボールなどの会場で取り組みを行い、併せて家族席も設けました。その他にも、多目的トイレや着替えができるトイレの設置、全ての会場での介助犬エリアの設定、視覚障がい者への情報提供を行うヘッドセットの導入、聴覚障がい者用磁気ループシステムの設置など様々な取り組みを進め、アクセシブルな会場づくりを実現しました。

D. これまでのオリンピックの取り組みと東京2020への期待

ソチ大会での取り組みについてお話します。この大会は、ゼロからのスタートで、大会の経験も乏しい状態でした。また、空港からのアクセスも良くありませんでしたが、3年間の積極的な努力で、大会を成功させることができました。具体的な取り組みとして、新設会場には、車椅子スペースを作り、車椅子の目線で見やすいようにかさ上げした席、アクセシブルを意識したトイレなどを設け、効果をあげました。それらは多くの都市に影響を与えています。

続いてのリオ大会は、先進国以外で初めての開催でした。アクセシブルな輸送、政府からの強いコミットメント、良い天候に恵まれましたが、景気が急激に悪化し経済的に困窮しました。サッカースタジアムは新設しましたが、レガシーである多くの既設会場を活用しました。

3大会を振り返ると、ロンドン大会ではアクセシブルな会場を作ることができ、ソチ大会では短期間でアクセシブルデザインを前進させることができました。リオ大会はソチとロンドンの中間と評価できるでしょう。

東京は元々アクセシブルな都市だと思います。また、代々木体育館などのレガシー（既設会場）もよく整備されています。ですので、東京が持つスタイルでアクセシブルデザインに取り組むべきだと思います。是非、忍耐強く妥協せずに進めてほしいと思います。

2-(2). 「パラリンピアンは準備ができているが、東京はどうか」

マーニー・ピーターズ (マーニー・ピーターズ社 社長)

A. アスリートが持つアクセシビリティに対する観点

これまで、ユニバーサルデザインとアクセシビリティに関して、コンサルタントとして20年間従事してきました。その間、国際的な非営利団体である GAATES (Global Alliance on Accessible Technologies and Environments) のエグゼクティブディレクターなどを歴任してきました。また、車いすバスケットボールの選手として、2000年のシドニー大会にカナダ代表として参加し、金メダルを獲得するなど世界で活躍してきました。現在は、汚染された広域の土地に、多目的アリーナやリハビリセンター、住宅、交通などを設ける都市計画に従事しています。

今回の発表は、「アスリートが持つアクセシビリティに対する心的な観点」についてお話をしていきます。私はパラスポーツのアスリートとして世界中を訪問してきました。その経験から、アクセシビリティは競技のパフォーマンスに大きな影響を与えることがわかりました。ですから、訪れた国でアクセシブルな経験ができたのか、あるいはそうでなかったのかは、その国に対する印象を決めてしまうため、ファーストインプレッションが非常に大切です。

最初にアスリートが経験するものは交通機関です。十分な車両があるのか、歩行器などを置けるスペースがあるのかなどが重要です。加えて、どこへ行くかがわかる交通機関、全体として使いやすい設備なども不可欠です。

次に、アスリートは公共の空間に触れることになります。選手村から競技会場へ行くための歩道や広場などがアクセシブルでなければなりません。シドニー大会では歩道がアクセシブルではなく、リオ大会では最短距離で移動ができませんでした。

また、建物や設備に関するアクセシビリティも重要です。アスリートにとっては、ロッカールームや鞆を置ける場所、スポーツ用と移動用の2つの車椅子を置けるスペース、トイレなどが重要です。

その他にも、アスリートに対する情報提供も考慮すべきです。スマートフォンなどを使って GPS 情報を提供することや、視覚障がい者のための触れて理解ができる地図の準備は良い取り組みです。シドニー大会では点字マップを配布し、リオ大会では、ハイコントラストや白黒の地図が設置され、ラジオを使った音声の情報提供がされていました。

B. 東京大会が行うべき取り組み

東京大会においても、これまでの大会の優れたアクセシブルな取り組みは、暫定的で

あっても取り組んでほしいと思います。

また、日本は地震などの災害を多く経験し、現在も直面しています。このような日本で、地震が発生するとその経験がない人には大きなショックとなり、競技のパフォーマンスに影響してしまいます。そのため、緊急・災害時の対策として、4,500人と想定されるアスリートや支援者への対応を考慮した計画が必要です。そして、車椅子や多国籍言語など考慮すべき点に対応できているのかなど、その計画のテストも含め準備してほしいと思います。

以上、パラリンピアンに競技で最大限の力を発揮してもらうためには、これまで議論してきたアクセシビリティは重要になります。環境、会場、関連施設のアクセシビリティはアスリートに心理的な影響を与えるので、是非改善をお願いしたいと思います。

C. パラリンピック後のパラリンピアンの行動

パラリンピック終了後にはパラリンピアンは観光客になり、開催国での体験を深めていきます。そういった方々に対する準備を進めてほしいと思います。私は今回東京に5日間滞在して試してみました。そこで得た体験としては、車椅子の利用者や手足に障がいがある方などに会う機会は多くありませんでした。障がいがある方々に対する経験が東京には少ないかもしれませんが、パラリンピアンに対する準備や応援が必要です。また、パラリンピアンは身体的・心理的・金銭的な負担を負って、東京にやってきます。その一部には、資金支援がされていない方もいますので、積極的に歓迎してほしいと思います。

3. 総合討論

3-(1). パネリスト紹介

川内美彦（東洋大学ライフデザイン学部人間環境デザイン学科 教授）

マセソン美季（日本財団パラリンピックサポートセンター

推進戦略部プロジェクトマネージャー）

（川内）：トッドさんとピーターズさんのご講演をお聞きしました。次にマセソンさんから自己紹介をしていただきます。

（マセソン）：私は20年ほど北米で生活をしています。以前に比べれば東京のアクセシビリティも向上していると思いますが、ただ、日本のバリアフリーが高水準に達している

という意見には、違和感があります。カナダもハード面が完璧なわけではありませんが、日本では自分が障がい者と感じる違和感を、カナダでは感じません。アクセシビリティに関してエレベータの整備などハード面は進んでも、人権などのソフト面までは考慮できていないからではないかと思います。車椅子で生活していく上で、日本ではフラストレーションを感じる部分もあります。2020年の東京大会には、日本人の持つ当たり前が通用しない人々が多くやってきます。これまでの対応では、いい印象を与えないのではと不安を感じてしまうので、大都市に寄せられている期待を裏切らないための対策が必要だと思います。

(川内)：先程、トッドさんがアクセシブルデザインの基本的な考え方としての3要素についてお話をされました。そのうちの尊厳 (Dignity) は日本では理解しにくいところではないかと感じました。マセソンさんがお話になった「日本に来ると障がいを感じる」という点は尊厳の問題につながると思います。次にピータースさんの講演の中で、パラリンピアンは観光客になるというご指摘がありました。東京には大変高い期待が寄せられています。その期待にどう応えられるかが重要になると思います。では、会場の方々にパネリストへの質問を受け付けていきます。

3-(2). 質疑応答

① フロアA

Q：トッド氏の講演で一部触れられていましたが、IPCのアクセシビリティガイドラインと大会開催国の国内法との葛藤があったと考えます。また、これまでの取り組みがレガシーとして残るためには、大会ごとではなく開催都市に引き継がれていくことが重要だと思います。今回の通常国会でバリアフリー法²を改正しようとしています。障害者権利条約³を批准してからの初めての改正となりますが、日本では規模が小さい建物や施設にはその取り組みが求められないという課題を抱えています。各国の事例から日本の取り組みに対するヒントはありますか。

A (ピータース)：ご指摘されたことは、様々な国が経験したことです。これまでの国々はIPCアクセシビリティと国内法を比較、評価して、最もアクセシビリティの良い方を採用してきました。また、ISO (International Organization for Standardization：国際標準化機構) の規格である ISO21542:2011⁴や5年毎に関連法規を更新しているイギリスやカナダの取り組みは参考になると思います。

A (トッド) : IPC アクセシビリティガイドラインはパラリンピックの大会開催に焦点を当てています。世界各国から専門家を呼び、大会がユーザーフレンドリーになるように取り組みを行っています。東京には、パラリンピックの視点だけではなく、アクセシビリティの基準を野心的に設定していただきたいと思います。

A (川内) : 今回の改正は評価が難しいと思います。障害者権利条約を必ずしも反映できておらず、東京パラリンピック向けの人的対応に主眼が置かれているともいえるのではないのでしょうか。ただ、貸し切りバスなどへの適用強化が議論されている点は評価できると思います。

② フロアB

Q : ご説明のあった「公平性」と「尊厳」の視点はこれまで聞き慣れない点であり、本日の講演をお聞きして良かった点です。マセソンさんは、日本では障がいを感じるが、カナダでは感じないと言われましたが、健常者はどのタイミングで手助けをすべきか、あるいは見守って尊厳を守るべきなのかの線引きを教えてください。

A (ピータース) : 今回の訪日のタイミングで、地下鉄に乗って東京をいろいろと試してみました。気付いた点は、エレベータを見つけにくいことと、車椅子利用者はいつも介助者と一緒で、後ろから誰かに押されていた。障がいがあったとしても、自身で積極的に活動したいと思いますが、東京ではそれが難しい状況だと感じました。東京には個別のツールはあるが、バラバラな状態に見えます。

A (マセソン) : 障がいを意識するのは、周りの人の視線、態度、言動から障がい者扱われていると感じるからだと思います。どのタイミングで声をかけたらいいいのかは難しい判断ですが、障がいがある人を見たから声をかけるのではなく、困ってそうな人だから声をかけるようにすればいいのではないのでしょうか。ただ、声をかけても状況によって断られることもあるでしょう。ですから、支援の申し出を一度断られたから、もうしないとは思わずに、今後もそのような行動を継続していただきたいと思います。

③ フロアC

Q : カナダに留学した経験があるのですが、そこでは障がい者であってもどのプールも使用できました。しかし、日本では障がい者スポーツセンターなどの専用プールしか利用できません。普通の環境で泳げればと思います。そのような観点から考えると、オリ

ンピックとパラリンピックの同時開催は無理なのでしょうか。

A（ピーターズ）：カナダでの経験はうれしく思います。カナダでは障がいがあっても平等で同じ学校に入学します。ただ、オリンピックとパラリンピックの同時開催については、アスリートの他にもトレーナーなどのスタッフが大勢いるため、スムーズな運営が難しいと思います。また、メディアの報道などがオリンピックにフォーカスされ、パラリンピックに脚光が当てられないことも考えられます。こういった理由から、それぞれが別期間に実施されることは重要です。

A（マセソン）：誰しものがスポーツが平等にできることは重要だと思います。しかし、日本では、専用施設である障がい者スポーツセンターが地域内にある場合、そちらを使用すべきとの風潮があり、身近でスポーツがしにくい感じがします。地域、例えば県に一つのスポーツセンターがあってもスポーツをするためだけに遠くへの移動は難しいと思います。こうした点について、柔軟な対応が必要だと思います。

オリパラ同時開催については、私は必ずしも好ましくないと思っています。パラリンピックには、パラリンピック独自のブランドがありますし、パラリンピアンとしては、独自開催がいいなと個人的には思います。

④ フロアD

Q：トッドさんにロンドン大会での観客輸送についてお聞きしたいと思います。スタジアムでは最大500名程度の車椅子の方々が観戦されたと思いますが、どうやって輸送されたのでしょうか。

A（トッド）：輸送の実現のために多くの施策を行いました。その一つとして、私も関わった交通輸送計画があります。具体的には、チケットを持つ観客一人ひとりの自宅から大会会場までの往復路とスケジュールを聞き、アクセスしやすく混雑を避けた順路とスケジュールを提案しました。併せて、障がい者用の駐車スペースを設け、大会会場へのシャトルバス提供、会場までの席案内サービスを提供しました。

(川内)：それでは時間が迫ってまいりましたので、本日の報告者とパネリストからメッセージをいただきます。

(ピーターズ)：東京大会の開催を今から楽しみにしています。大会開催時には多くのパ

ラリンピアンを受け入れ、応援していただき、終了した際には障がい者の持つ能力の発見、そして継続的な支援が必要ということの理解を深めてほしいと思っています。是非、日本の良さをパラリンピアンに見せてください。

(トッド)：東京大会の成功を確信しています。日本のサービスの高さやおもてなしを最大限活用して、できるだけ高い目標を持った大会にしてほしいと思います。

(マセソン)：2020年は、世界中から多くの観客・アスリートがやってきて東京が評価されるタイミングになります。その際に、日本は素晴らしい、そして東京にまた来たいという気持ちになってもらうためにも、ファーストインプレッションが重要だと思います。

(川内)：東京では車椅子でノンステップバスに乗る際には運転手がサポートしてくれます。また、自動車の技術開発の動向は自動運転が大きなテーマとなっており、地方のバスの自動運転もホットトピックです。将来考えられる、自動運転のバスに車いすで介助無しで乗り込むという技術課題に非常に関心があります。現在のところ、身近なハンドル型車いすで公共交通機関を利用する際には特別な証明書が必要となっています。このような問題はレベルが低すぎると思いますので、改善が必要です。

このワークショップを通じて、アクセシビリティは社会の基盤だと議論してきましたが、重要なことはアクセシビリティ自体ではなく、それを基にした平等な社会参加の経験の獲得です。大会開催までの短い期間を有意義に使わなくてはなりません。

以上

注

- * 本稿におけるインターネット情報の最終アクセス日は、2018年6月1日。
- 1 コモンウェルスゲームとは、4年毎に実施されるイギリス連邦が行う総合競技大会。
- 2 バリアフリー法とは、「高齢者、障害者等の移動等の円滑化の促進に関する法律」であり、現行法は2006年6月21日公布、同年12月20日施行。国土交通省ホームページ<<http://www.mlit.go.jp/common/000207186.pdf>>。
- 3 障害者権利条約とは、「障害者の権利に関する条約」であり、2014年1月20日に批准書を寄託し、同年2月19日に効力が発生。障がい者の人権及び基本的自由の享有を確保し、障がい者の固有の尊厳の尊重を促進することを目的として、障がい者の権利の実現のための措置等について定める条約。外務省ホームページ<<https://www.mofa.go.jp/mofaj/files/000025629.pdf>>。
- 4 ISO21542:2011とは、アクセシビリティやユーザビリティに対する要求事項をまとめた建築に関する国際規格。ISO ホームページ<<https://www.iso.org/standard/50498.html>>。

Summary Report on the 28th Workshop “The Paralympics and Accessibility”

Akira NAGAMATSU

Date: February 20, 2018, 10:00-12:00
Venue: Conference Hall at the Nippon Foundation Bldg., Tokyo
Theme: "The Paralympics and Accessibility"
Speaker: Mark Todd, Senior Accessibility Consultant, access all areas
Marnie Peters, President, Marnie Peters & Co

Preparations for the Tokyo 2020 Olympic and Paralympic Games are underway both in terms of the hardware, such as construction of related facilities, and the software, such as establishment of systems for managing the Games. In both of these aspects, full consideration needs to be given to ensure accessibility for spectators who will gather from around the world. In particular, there needs to be careful consideration to enable people with disabilities to have smooth access in watching and participating in the Paralympic Games.

Important perspectives in ensuring such accessibility will be “equality” so that everyone can share the same experience, “dignity” so that older people and people with disabilities are not inconvenienced, and “functionality” that enables comfortable use of facilities. In terms of the hardware, Tokyo should use as reference points what was tackled and put into practice at London, Sochi, and Rio de Janeiro. In terms of the software, designing easy-to-understand websites for online ticketing will be one of the important aspects. For the Paralympians, accessibility needs to be considered from various perspectives including easy use of facilities, smooth movement and transport, and emergency disaster response.

In the run-up to the Tokyo 2020 Games, various kinds of preparations, including the installation of lifts, will be undertaken individually. To avoid situations that might hamper users, there needs to be systematically well-coordinated, universally accessible hardware and software in every aspect of the Games.